差別と区別と

Discrimination and Distinction

天 野 光 一^{※1}

Koichi AMANO

数年前からダイバーシティのWGで議論に参加させていただいている。基本的には工学の世界における男女参画の平等について議論をしているものと理解している。筆者とは異なる様々な意見に触れることができたへん刺激になっている。筆者がダイバーシティなる概念に出会ったのは30年以上前フランスに行った時である。ピエノワール（アルジェリア出身のフランス人）をいう言葉をやや差別的に聞いたとき、そのような感覚があるものかと思った。それとおおむね逆の感覚を感じたのは、あるシンポジウムの席で「ムッシュアmanoはいつからフランス人か」と聞かれた時である。戸惑いながら「日本人だ」と答えたわけだが、後から聞くとフランスでは、フランス国籍を持っていればフランス人であるそうだ。人種や国籍の多様性について考えさせられたところであった。余談であるが、最近学生と「日本人の定義は」という議論をしている。日本国籍を持っていれば日本人だと考えている人はどのくらいいるのか、サッカーやラグビーの影響で少しは変革したのであろうか。

男女の性差の話に戻ろう。筆者は男女の差をあまり感じない方であると思っている。これは筆者の育ってきた環境によることが大きいと思う。中学高校は男子校で大学も土木の分野であり、競争する相手に女性がいなかったため、差を感じる機会がなかったのである。また、専門分野の最も優秀な後輩の一人も女性で大学教授を務めるとともに社会的に影響のある仕事をしている。最も優秀な教え子も、フィリピンで出会った日本人女性であり、博士論文をフィリピンで優秀な成績で獲得し、一時日本大学理工学部を務めるが、その後、国連でアフリカで働き、その時知り合ったオランダ人を伴侶とし、JICAでラオスに行き、現在は世界銀行でワシントンで活躍している。ついでに言うとな娘も土木系の大学、大学院を出、ある地方自治体で土木職の職員として働いている。このような人々が周りにいると、女性の能力に疑問を持てるわけもなく、自分では、区別はしているが差別はしないと思っている。しかし、今回このWGに入れていただいた後、区別と差別をどのように認識するかを悩んでいるところである。例えば、重いものがあるれば、比較的体力のある男性が率先して持つのは区別で良からう。女性は産休を

とるのは当たり前であろう。しかし、研究者の中で過去3年間の業績を問題にすると、当然産休期間中はその期間に入れないことが当然とは思われるものの、3年任期制の場合筆者が産休期間を無視した研究実績評価はおかしいと説明しきれぬかどうか不安がある。更に、建設会社の管理職で女性の方に会ったとき、珍しいなとは思ってしまう。女性が管理職につく能力がないなどは決して思っていないのであるが、珍しいと思うこと自体が差別であるのかと考えてしまう。Unconscious Biasの一種であろうと思うが、すでにその感覚が差別への一歩ともいえる。

差別につながりやすいUnconscious Biasが出現する原因のひとつは、この分野で素人である筆者が勝手に考えるのも失礼な話ではあるが、集団の分布の特徴とその集団に属する適性を混同していることではないだろうか。建設会社の管理職という集団で女性が少ないのは現状である。しかしそれは今までの種々の環境（それが問題であることは重々承知である）がその状況を生んでいるのであって、能力とは全くといって関係がない。その種々の環境を改善していく必要があることは当然であるが、それををにらみながらもまず分布を改善していく必要があるとも思う。理工系の大学で、教員のみならず学生でも女性の割合が少ない。その原因となっている種々の環境問題は説明しきれないが、女性が理系能力に劣るはずがない。日本大学理工学部では、女子学生・女性研究者支援活動として、キャリアウェイ整備、キャリアUP支援、学生の意識調査、教職員の意識改革推進、制度改革等を挙げ、具体的には高校生に対して「女子高校生のためのサイエンスセミナー」を毎年実施している。この効果もあつてか、理工学部の女子学生割合は、平成21年度に12%であったのが、令和元年度には16%と微増している。理工学部は女子学生が少ないといういわれなき集団の特徴を少しでも減じることができているのではないだろうか。この流れが続けば学生のみならず教員の女性割合も増加に通じ、日本大学理工学部が普通の感覚の教育研究社会に近づくと考えている。

最近、「EqualityからEquity」へということを聞いた。条件を同等にするだけではなく、到達点としての公平を目指すことだと簡単な解説をいただいた。十分理解した訳ではあるまいが、なるほどと感じた。男女の性差を含めたダイバーシティを尊重した社会の実現のために筆者も何らかの活動ができればと考えている。

2019年11月18日受付

※1 日本大学理工学部